



教職大学院 Newsletter

No. 3

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻

2008.05.16

新たな教師教育の幕開け

教職大学院がこの4月から無事にスタートできたことを非常にうれしく思います。

この21世紀は教育の世紀とも言われるほどに教育が重要視されています。その教育を支えるのはほかならぬ教員です。いま、教員の質の向上と学校改革が焦眉の課題になっているのはそのような世界的な動きと深く関連しています。もちろん、わが国においては、これまで教員の質の向上ということが幾度となく議論されてきました。そのために教育単科大学が設置されました。これらの各大学では大学院レベルの現職教員研修受け入れ200名、そのための家族も住める宿舎を完備し、広大な土地に同じ国立大学とは思えないほど贅沢な施設が用意されました。いまでいう大学院大学の先取りともいえる構想でした。もっとも、これらの設置には明確な別の政治的意図があったのも事実です。1973年に成立した筑波大学法案の成立後に設立された新構想大学で、大学管理体制の強化、教育と研究の分離、全構成員による大学自治の否定、産学共同の研究教育体制の確立という中教審路線の具体化でありました。しかし、各大学はこの200名定員の確保に苦勞をされました。その後、博士課程の設置という縦軸の改革もされましたが、なかなか大変だったようです。そもそも教員養成の高度化のシステムを集約的に行おうとしたことや教育と研究の分離という構想そのものに無理がありました。人を育てることは研究の論理だけではうまくいかないのです。ましてやそれを学校改革と連動させるとなると大変なことです。発展的ワーク・リサーチの提唱者であるユーリア・エンゲストロームは、活動のシステムはその置かれた社会的条件や歴史的・文化的な背景を無視してはうまく機能しないということを述べています。福井大学の教育地域科学部では、新たな学問研究の成果とそれにもとづく教員養成の新たな世界の動きにいち早く注目をし、福井方式と称される独自のデザインを準備してきました。教職大学院を設置しえたのもまさにそのようなことがあったからです。活動システムにとっては、分析とデザインのための認知的アーティファ

前教育学研究科長 黒木 哲徳

クトが必要とされます。そのことを探求ネットという活動の中で学生自身が、学校改革実践コースの中で現場の教員自身が主題探求的実践研究の方法を通して確立してきました。2007年3月に出版された学校改革実践研究コースの「実践コミュニティと省察的機構」にはこれまでの研究の足跡が示されています。事例研究を中心に据えた新たな教師教育の取組は、教師をショーンのいう反省的実践者として捉え、発展的ワーク・リサーチの手法も取り入れたものがあります。今後この試みは、教職大学院に引き継がれ発展して行くと思います。この冊子は是非とも英訳して、世界に発信して欲しいと思っています。日本の小さな大学で、これだけのことを産み出せた力は非常に高く評価していいと思います。時の流れに身をゆだねた改革ではなく、自ら教師教育を切り開こうとした試みの結果だといえます。

この教職大学院のもう一つの特筆すべきことは、県の教育委員会の全面的な協力と県から優秀なスタッフを派遣していただいたことに加えて国内外から優秀なスタッフを迎えることができたことです。これはひとえに学部構成員の皆様のご理解があったからだに感謝しています。しかしながら、いまの専任スタッフだけでこれを動かすのはとても大変です。是非、学部をあげてこの貴重な試みを支えて行って欲しいと思います。大学は国民のために新しい価値を創成する使命を帯びています。既存の枠をそのまま持続するだけではその使命は果たせないのです。今後とも、学部の構成員の多くの方々がこの福井大学方式の教職大学院の発展に深く関わっていただくことを願ってやみません。来春には福井大学を去ることになりますが、陰ながら発展をお祈りしたいと思います。

内 容

- 新たな教師教育の幕開け(1)
- 4月の合同カンファレンスを終えて(2)
- Staff 紹介(6)
- 院生の自己紹介(9)
- 研究集会・ラウンドテーブル予告(16)
- 教職大学院報道ファイル(19)
- 教育実践と教育改革を考えるために(20)

4月の合同カンファレンスを終えて

教職大学院がスタートして1か月。4月26日・27日に教職専門性開発コース・スクールリーダー養成コースの院生合同でカンファレンスを行いました。小グループでの話し合いや個人でのまとめ作業を通して、改めて4月を振り返り、教師としての自分の課題やこれから大学院で中心に検討していく課題について、見通しを持つことがねらいでした。

小グループでの話し合いでは、1日目は教職専門性開発コースのストレートマスター（学部からの進学者）が各拠点校でのインターンシップで学んだことを報告し、2日目は教職専門性開発コースの臨時任用教員やスクールリーダー養成コースの現職教員が報告しました。院生同士、様々に刺激を受け合う機会になったようです。2日間を通して聴き取ったことや考えたことについて Newsletter を通して共有していく特集。今回は6人の方にお願しました。

4月の合同カンファレンスを終えて

スクールリーダー養成コース 鈴木 秀卓（坂井市立丸岡南中学校）

4月26日（土）・27日（日）の2日間に渡り、初の合同カンファレンスを体験した。大学院入学後初のそしてまた、本校における新年度の研究がスタートして初のカンファレンスであった。

事前にカンファレンス開催の案内をいただいたときには、正直、「カンファレンス」の意味がわからなかった。ひそかに辞書で調べてみた。すると「会議・協議・連盟・同盟」と記されていた。さらに「『会議』では意味が広すぎると感じられる場合は、内容に即して『検討会議』『研究会議』などと言い換えることもできる。」と記されていた。カンファレンスの意味を自分なりに解釈して、当日を迎えた。

この2日間は、次のような日程であった。

【1日目】

□各校（至民中・武生第二中・丸岡南中）における、4月からの取組を報告



□自校の研究経過をまとめる



□インターンシップを体験しての報告（福大附属中）

【2日目】

□自校の研究経過をまとめる



□スクールリーダー養成コース在学者の各校（嶺南教育事務所・丸岡南中）での取組報告

このような日程のもと、2日間たいへん有意義な内容となった。数校ではあるが、他校の取組経過をお聞きすることができ、たいへん勉強になった。そして、何よりも自校の取組を報告したり、慌ただしく過ぎ去った1か月間をじっくり振り返り、それをまとめたりすることができたのが、何よりも収穫だと感じている。

年度末から、会議を繰り返す中で、平成20年度の研究の方向性を考え、いよいよ4月から研究をスタートさせた。しかし、日々の学校生活の中で、じっくりと振り返る時間などないまま4月が終わろうとしていた。そんな中での合同カンファレンスは、1か月を見つめ直すことができ、研究主任の私にとって、とても有意義な2日間となった。よい機会をありがとうございました。



合同カンファレンスを終えて

スクールリーダー養成コース 田上 博一（福井県特別支援教育センター）

「合同カンファレンス」は聞き慣れない言葉で、さすがに大学は新しい取組をする場所なのだと一人で納得していた。実際に参加すると、自分の考えを話したり、人の話を聞いたり、特に新しいことではなかったが、「カンファレンス」と聞いて何か特別なことを始めるような気持ちになれたので、私にとって意味があったと思う。

今回、ストレートマスターの報告を聞いて、新採用のころの自分を思い出した。研究授業に向けて先輩から御指導をいただいた時の緊張した気持ち。たくさんの助言をいただき、ただ頷いているだけだった時の気持ち。教員として経験を積んだ今となれば、あの時いただいた助言の意味や先輩の気持ちが分かる気がする。ただそのころは、十分理解できていなくても「学ぼう」とする気概があり、「失敗を恐れずチャレンジしよう」という姿勢でいた。今回の報告を聞き、手探りながらも「学ぼう」とする意欲が強く伝わってきた。

また、自身の4月の取組を振り返る時間をもてたことも有意義であった。慌ただしく過ぎた印象であるが、改めて振り返ると日々の取組の中で明らかとなった課題がいくつもあった。これらを整理できたことで、今後の取り組む方向性が明らかになった。

私は、福井県特別支援教育センターに勤務しているので、特別支援教育に関する発表や報告に触れることは多い。その一方で、小中学校の通常学級の実践に触れることは少ないため、特別支援教育に偏った見方をしていないか不安を感じていた。カンファレンスの中で、通常学級の取組を聞いたり、私の取組に対する意見が聞けたりしたことは有意義であった。特別支援教育を特別な教育にしないためには、通常学級で行われている教育の視点を持つことが重要である。本来、どの子どもにも教育的ニーズがあり、一人一人に応じた適切な支援が行われるべきである。一人一人を大切にしたい学級づくりや学習・行動特性に応じた指導の充実、学習環境の整備、自己肯定感を高める工夫などは、適切な指導と必要な支援を行うためのポイントとなる。これらは、特別な教育的支援を必要とする子どもだけでなく、子どもたち全員にとって有効な指導や支援となるはずである。

今後も定期的にカンファレンスやラウンドテーブル、集中講義が予定されている。これらを自身の教育実践を振り返る節目として、また他の実践者と意見を交わし合いながら視野を広げていく場として、研究を進めながら自らの力量を高めていきたい。

4月の合同カンファレンスを終えて

教職専門性開発コース 永宮 智美（福井県立福井東養護学校・本校）

「みんな、同じなんだなあ。」というのが、2日間を終えての私の素直な感想である。ストレート院生、臨任院生、スクールリーダー院生、それぞれ専門や校種、学校内での立場などいろいろと違っていても、それぞれに悩みや問題を抱えていた。話を聞くことで「私だけじゃない」と、そして、話を聞いてもらうことで「今の私そのまま、ぶつかっていけばいいのかも」と、お互いに話をすればするほど元気をもらったような気がする。

日々、クラスや学部などで話し合う機会は非常に多い。しかし、全体的な話や事務的な内容についての協議が大部分を占め、自分自身の実践やその中で思っていることについてじっくり話す時間はなかなか取れないのが実情である。今回のカンファレンスで丸々2日間費やし、自分の実践や課題・悩みなどに向き合い、言葉にして出すことで、もう一度自分の中でとらえ直すことができた。

また、素敵な出会いもあった。学校に勤務するようにな

って、他校の臨任講師の人とざっくばらんに話をする機会はあまり多くない。そんな中、2日間を通して同じグループになった二人の先生とは、今の学校での現状や抱えている悩みなどに始まり、これまでの人生を振り返った（？）世間話に至るまで、たくさんのことを話した。ふと疲れても、二人がそばに居て頑張っている姿を見たり、少しのおしゃべりをしたりすると、「もうちょっと頑張るかあ！」という気持ちになった。こんなふうに見える人たちと出会えるのも、カンファレンスならではのかもしれない。

そして、最後にもう一つ。人前で自分について話すことがとても苦手で、報告をする2日目のクロスセッション前は緊張して、心臓がバクバクだった私……。しかし、教職大学院に在籍している以上、このセッションからは逃れられない運命だと悟った。「この2年間で“人前発表苦手病”を克服するぞ！」と覚悟を決めた、4月の合同カンファレンスであった。

初めての合同カンファレンスを終えて

教職専門性開発コース 藤川 洋平 (福井大学教育地域科学部附属中学校インターン)

今回の合同カンファレンスは私にとって、大変貴重な体験であった。長期インターンシップが始まって1か月。今までとは全く違った生活習慣で日々を精一杯過ごし、ようやく学校のサイクルに慣れてきた。自分のこれからについて考える時間もできて、この1年間で何ができるだろうと期待が膨らんできたが、疑問や不安も膨らみ始めている。それをこの2日間でぶつけることができた。

1日目に行われた、自分の1か月を振り返っての報告は私にとって大変大きなものを占めていた。今までは報告者の報告を聞く立場だったが、今回は先生方に報告する立場になったからである。報告する内容は十分なものであるか、自分の1か月はどうだったのだろうか等、報告を始めるまでは不安で一杯だった。しかし、報告を行って感じたことは報告の内容ではなく、『報告する』ということの難しさだった。自分が学んできたこと、感じてきたことを文章にすることはあったが、口に出して報告するということが今までになかった。この経験を通してその難しさを知った。

また、2日目に行われた現職の先生方の報告も大変興味深かった。私は学校での先生方の動きを見て、仕事の多さに驚いていた。その仕事の内容、取組の姿勢を報告で聞く

ことができた。先生の動きの裏にあった『考え』を聞くことで、今までとは先生を見る視点が変わったように思う。様々な取り組みを聞くことで多くのことを吸収することができたが、何より先生方も自分の取組に対して、悩み、苦しんでいるということを知ることが一番印象的であった。時として、「先生」はすべてのことを知っているスーパーマンのような存在に思われがちだが、先生方の話を聞くことで実際には私たちと同様に日々学んでいるのだと知ることができた。

1か月間の実践を積み重ねていろいろな情報を吸収し『インプット』するばかりの毎日だったが、合同カンファレンスでの報告は吸収したものを初めて『アウトプット』する機会であった。この経験を通して、今まで雑然としていた頭の中の情報を整理することができたように感じる。このような機会を定期的にとることで、自分のやりたいことを明確にし、充実したインターンシップを創り上げることができると思う。この2日間は教職大学院が目指す「理論と実践の往還」の重要性を少なからず感じ取れた2日間だったように感じる。

合同カンファレンスを終えて

教職大学院教員 上野 澄子

4月26,27日、学年始めのタイトな日程を縫って、合同カンファレンスが行われた。記念すべき第1回。入学者がそろって出席できたことを意義深く感じている。

教職大学院には、学部を卒業した後のストレートマスターと学校現場で勤務する臨時任用の講師たちがいる。彼らは1年目の現在、学校でのインターンシップに日々励んでいる。一方、スクールリーダー養成コースのベテラン教員もいる。これに大学側の教員が加わり、年齢構成が広がって、当日の会場は職員室さながらの様相であった。この4種類のメンバーがシャッフルされて世代間の交流が行われたり、同一構成になったりすることで、大きな刺激を受ける2日間となった。

特に興味深かったのは、拠点学校に所属するインターンとそのメンター教員(支援するスクールリーダー)が、同じテーブルに着く場面であった。日ごろ同じ学校で、同じ時間を共有していても、授業と雑務に追われるため、なかなか話し合う機会が持てず、お互いの思いを伝え合うことが難しい。

このセッションを通して、インターンはメンター教員へ

の希望や疑問を述べるチャンスを与えられ、ずいぶんすっきりしたようである。また、メンター教員はインターンの率直な気持ちが聞けて、どんなことを感じているのか理解したようだ。大学教員は、間を取り持つ仲人のような思いで、聞き役に徹した。親子の差に近い世代構成であるせいか、家庭での会話の雰囲気や雰囲気を彷彿とさせていた。

教育現場での協働研究とは、同僚性を紡ぎながら、子どもたちのことや研究課題について、得心のいく話し合いをすることだと考えている。これは学校だけでなく、企業などでも同様だと思われる。仕事が山積する中、話し合いの時間を生み出すことは困難のようだが、わずかな時間を割くことで、得られるものはその何倍にもなるのではないだろうか。

多忙な日々でありながら、教職大学院に入学された方々には、教職大学院という協働研究の機能をフル活用されることを望んでいる。次回の合同カンファレンスやラウンドテーブルも、いっそう実りあるものとなり、それぞれの学校がますます元気になるよう、スタッフとして精一杯サポートする所存である。

合同カンファレンスを終えて

教職大学院教員 森 透

4月末の合同カンファレンスは院生の皆さんが1か月間のそれぞれの実践をお互いに聞き合い共有する場でした。スクールリーダーの先生方は、拠点校の先生も連携校の先生も、それぞれの職場で新たに作り出そうとしている研究や実践、及びクラス運営、学校づくりについて省察する場となり、インターンシップの院生にとっては、本当に緊張して疲れる1か月間であったと思います。インターン生は週3日が拠点校、1日が大学のリフレクションの協働ゼミという日程。1週間のサイクルを自分なりに作り出し、そのサイクルを体調管理も含めて実践していくことは、今までの学部生の生活サイクルからは考えられないことであったと思います。しかし、教師の生活を直接見て聞いて実践できる新鮮な機会は、学部時代の短い教育実習とは比較にならない貴重な経験となっていることは確かでしょう。

私がグループでお聞きした拠点校と連携校のケースを少しご紹介します。拠点校の至民中と丸岡南中の先生と同じグループとなりました。教科センター方式を共通としつつ、既に新しい校舎が完成している丸岡南中と、この4月に新たに校舎が完成した至民中という違いはありました

が、「場」が学びを規定するという側面があるように、従来の個別の教室ではなく、教科ごとに生徒が移動しつつ新たな学びを作り出していくこと、ホーム制という異学年集団のもつ特徴（今までの中学校では考えられない新たな学びの集団）、これらの中学校生活での新たな制度を中身のあるものにしていくことは、むしろこれからだと思います。両校の試行錯誤の足跡を少しお聞きすることができました。武生第二中では、武生第一中とともに「総合学習」でお互いに学び合いながら実践を進めていく予定です。4月中に一度協働ゼミを武生第一中で行いました。それぞれの学校の総合学習のテーマを聞き合いながら、総合学習への風当たりが厳しくなっている現状で、むしろ教科と総合学習を結び付けるような学び、子どもにとって時間割ごとの機械的なバラバラな学びではなく、できれば一つのテーマを連続して探究しながら学びを深めていけるような協働した学びを作り出していかれたらと期待しています。1か月間という短い期間の中で、それぞれの院生が一步を踏み出し、それぞれの場で工夫しながら実践を創造していることを実感した合同カンファレンスでした。



Staff 紹介③

教職大学院には様々な分野で実践と研究を重ねてきているメンバーが集まっています。そして教職大学院の専任教員ばかりでなく、多様な視点と位置からこの教職大学院を支えています。そうしたスタッフそれぞれの固有の実践と研究の歩み、教職大学院に寄せる期待、これからの展望について語ってもらうコーナー。第3回です。



岸野 麻衣 きしの まい

私は2007年4月に福井大学に着任し、1年間教職大学院の準備に携わってきました。いよいよ4月から教職大学院が正式にスタートし、スタッフの一員になれたことをとてもうれしく思っています。どうぞよろしくをお願いします。

授業研究との出会い 私は大学を卒業後「臨床心理学を学んで研究をしていきたい」と思い、臨床心理士の資格を取れる大学院に進学しました。精神科病院や適応指導教室、養護学校など様々な現場で実習を行いながら、臨床心理学の知識と技法を学んでいきました。大学院には、学部の授業の中に、小学校で授業観察を行うという、私の出身大学にはない授業がありました。私は「普通の学校の様子も見ておくか〜」という軽い気持ちで受講することにしました。実際に小学校に行ってみて、驚きました。授業の中では、思っていた以上に、子どもも教師も話し、動き、様々にやり取りがなされていたのです。古典的な心理学の研究では、実験や質問紙調査などの手法が多く用いられますが、それでは実践現場の豊かさを削ぎ落としてしまっているのではないかと感じました。私は学級での豊かなやり取りそのものを研究してみたいと思うようになりました。

学習者になるということの意味 修士・博士課程の数年間、いくつかの公立小学校で1年間ずつ週に1,2度の頻度で学級の観察研究を行いました。ビデオに記録した授業での発話を文字に起こし、子どもや教師の発話数や発話内容を分析しました。特に、小学校に入学した子どもが、学ぶ姿勢を身に付けて学習者らしくなっていくには、どのような指導がなされるのかに焦点を当てていきました。具体的には「授業から外れた子どもの発話に教師はどのように対応しているのか」「教師は学級の規範をどのように導入し子どもはどう反応していくのか」「集団での学習が難しく個別の支援を必要とする子どもに教師はどのようにかかわるのか」などです。学習者になるということは、他者と

の関係性なしには成し得ず、教師は教科の学習指導と同時に、授業の中でのやり取りを通して子どもの自己形成や人間関係もはぐくんでいることに気付かされました。

教科や総合学習の奥深さ/背景にある教育制度 個人での研究と並行して、大学の研究室がかかわっていた共同研究や国立教育政策研究所の研究にも参加しました。小学校の総合的な学習で子どもも主体に活動を立ち上げていく過程での教師の思考プロセスや、中学校の国語で子どもが自分の読みを作るための指導方法、発達の側面からみた小中一貫教育の意味などの研究です。総合的な学習の面白さと難しさ、教科の世界の奥深さに触れ、また授業の背景にある教育制度の意味についても考えさせられました。

不適応を起こした子どもを巡る支援 心理臨床の勉強も続ける中で、精神科クリニックでの心理士の仕事や、中学校・高校でのスクールカウンセラーの仕事も行うようになりました。不適応を起こした子どもや、様々な悩みを抱える親たちへの支援のほか、担任の先生や教育相談の先生と一緒に支援方法を考え、教育相談体制の構築に向けて協働しました。これらの仕事をしていく中で、「相談機関に相談した個人」や「学校の『教育相談』の枠」に留まらず、日々の授業や行事など生活文脈の中で支援を考えていく必要性を感じるようになりました。

そして福井大へ 私は、臨床心理学を学んでいながら、不適応を起こした子どもを取り出して個別に心理的支援を行って元に戻すという心理臨床のモデルに疑問を感じ続けてきました。福井大学で、多様なバックグラウンドをもつスタッフや院生に出会い、ここなら、日々の授業や学級を通してどんな子どもも様々な成長発達できる方法を見つけられるのではないかと感じています。

これまでは、現場の先生方に学校のことを「教えてもらう」立場が多かったのですが、今は「一緒に考えていく」立場になりつつあります。専門の理論をより深め、生かしていくとともに、現場の豊かな暗黙知を言葉にし、学問の世界にも繋いでいけるよう研鑽していきたいと思えます。

玉木 洋 たまき よう

この春、全国 19 の教職大学院がスタートしました。その中でも福井大学教職大学院は「学校拠点の協働研究の展開とその省察を中心に据えている」というユニークさが売り物です。その際立った独自性の中に、研究者教員、実務家教員、そして私のような毛色の変わった企業組織経営者が混じっています。大学院生もストレートマスター、臨時任用教員、スクールリーダーと多様です。

「経営者は教育者へ、教育者は経営者へ」

私は、35 年前に現勤務先の福井キャノン事務機㈱を設立し、以来、自社の人材育成と組織能力の向上に努めてまいりました。その結果、「卓越した組織経営のモデル」として 2006 年度日本経営品質賞の受賞に至りました。その傍ら、国内初の地方版推進機関として「福井県経営品質協議会」を 1998 年に設立し、代表幹事として、県内組織の経営品質の向上活動を推進しています。また、「福井経済同友会」では、企業経営委員会と人づくり委員会の委員長を経て、2005 年から代表幹事を務めています。

これらの活動を通して「経営者は教育者へ、教育者は経営者へ」という思いを強めていた折に、福井経済同友会の活動の中で、福井大学において教職大学院の設立構想を進めていることを知りました。「知識基盤社会の教師教育改革を福井から」という志の高さと人材・組織能力向上の考え方や方法に共感して、その内容を 2007 年 1 月の「福井経済同友会・人づくり提言」に反映させていただきました。

http://www.f-doyukai.jp/070_teigen/pdf_09.pdf

「対話」の中から実践展開へ

4 月 26 日(土)、27 日(日)は、「合同カンファレンス」に初参加しました。「合同カンファレンス」は、いくつかの小グループに分かれて、それぞれの教育実践活動の中から気づき、考えている課題を提供し、それらをクロスセッションの「対話」の中から、どのように「探究心」を深め、さらに「協働」の中で、次の実践展開構想を見いだして行くという試みです。大学教員は、対話の進行役を務めながら、それぞれの院生の想像力や創造力を引き出し、共有し、教育現場での実践活動につながるアウトプットを導き出して行くことを狙いとしているように見受けられまし

た。

私もクロスセッションに参加して、話し合いのプロセスや内容を観察させていただきました。その中で、教育現場での教員の人材育成、組織能力向上への取組、地域との協働の在り方、教育指導方法改善の取組など、学校経営の現状と将来に関する認識を深めています。



企業も、学校も組織経営の品質向上は同じ

この 2 日間の「合同カンファレンス」から、民間企業も学校組織も、革新に向う組織経営に関しては基本的に同じ課題であることを確信しました。教育という提供すべき職業専門能力の対象や価値は異なっても、どちらも人間で構成される組織経営の問題ですから共通性があるのは当然です。また、変化に対応すべき社会環境も共通ですから問題の解決方法も基本的に同じです。それは、リーダーシップによる人間力と組織能力の向上が、①目的志向による経営の明確化、②話し合いのクオリティ向上によるより本質的な問題解決、③気づきからの知と行動実践の検証・改善に支えられることを改めて認識しました。

「創発型」教育実践が重要に

また、私のような画一的、大量生産型教育を受けてきた団塊世代とは異なり、対象としている幼児・児童・生徒への個別対応が今日の学校教育の現場では要請されており、創発型教育実践が重要な課題であることも学びました。これは、民間企業での顧客接点对応でも同様です。

全般に、参加されている大学教員も、大学院生も、自己開示力、観察力が高く、特にスクールリーダーの方々の知的レベルや実践力の高さには感心しました。「授業づくりや生徒指導の実践リーダーの育成」という教職大学院の目的に十二分に適した資質の方々が集まってきている観があり、心強く、これからも楽しく参画させていただきます。



松田 淑子 まつだ としこ

昨年4月に着任した松田淑子です。福井大学着任前は、金沢大学の附属高校で、家庭科や総合的な学習の教員をしていました。現在、学部や修士課程の「家庭科教育」を兼担しています。

この1年、これまでの自分を振り返りながら、これから自分が何をすべきかを模索してきました。

金大附高という同じ環境の中にずっといたため、時代の変化による学校内や生徒たちの変容など、縦の流れはとらえやすかったのですが、他校との接点は少なく、横の位置関係を見ることはほとんどできませんでした。ですから今、いろいろな学校で授業を参観させていただいたり、先生方のお話を伺ったりすることは、自分の立ち位置を客観視する意味でも、私にとって大きな学びとなっています。

話は少しさかのぼりますが、実は私は、自分が生徒だった時、家庭科が得意な生徒でもなければ家庭科が好きな生徒でもありませんでした。実技では、不器用だった上に、家に持ち帰って母親に作ってもらった被服の作品を出す友達ばかりが良い成績になることへの反発がありました。座学の授業では、生活者として当たり前のことを念押しされるか、または自分自身の生活観と異なる生活観を「正しいこと」として押し付けられる気がしました。普通は、その教科が得意で好きだからその教科の先生になるものなのでしょう。でも、私の場合は、そうではありませんでした。

高校家庭科は、平成6年度から男女必修になりました。その告示のあった平成元年から、金大附高でもカリキュラム再編に向けた取組が始まりました。しかし、いくら学習指導要領がそのようになるからといっても、ジェンダーバイアスが色濃く残っていた当時、いきなり男子の家庭科4単位履修には、大きな反発がありました。そこで、生徒へのアンケートや、理科・社会などの隣接教科教員とのディスカッションをもとに、校内での家庭科公開授業（「洗剤」を扱ったテーマ学習の全授業を公開にしました。内容は今で言う「環境教育」に近いもので、実験や調査などを踏まえて、皆で議論していくというものでした。）と反省会を実施しました。授業には多くの先生方が多忙の中を観に来てくださり、反省会でも温かいエールを送ってくださいました。これを機に、校内の家庭科に対する意識と理解は深まったように思います。私自身にとっても、初の試練を乗り越え、家庭科教師としての自覚が芽生えるとともに、「家庭科って何？」という問いを自分自身の問題意識として持つことができた貴重な経験でした。「教科書に書いてあるからこの内容を教える」のではなく「家庭科

とは何か？」という問いを持ちつつ教師自らが家庭科を創造していくことの意味を学びました。金大附高の校訓は「自主自立」。生徒のみならず、教員の側にも流れるこの校風が後押ししてくれたと思っています。「新しい家庭科の創造」これが私の原点であり、現在もこれからも追い求めていることです。

金大附高は、各教員の末端での意見の相違はあっても、「教育とは人間を育てることなのだ」という共通認識を核としていました。「『どんな人間を育てたいか』」ということを常に意識しつつ、教師としての自分のスタンスを決め、自分の教科を考え、その中の1コマとして1時間の授業を組み立てるのだ。」若い時に伺った年上の先生の言葉は、私の指針となりました。このような古き善き伝統が、お題目としてではなく現実として残る環境で教員生活を過ごせたことは、本当に幸運だったと思います。そして、金大附高で培ったこの教育観は、福井大学の教職大学院の核ともつながっているように思います。

さて、子どもをめぐる環境は、自分たちが育ったころとは大きく変化しているようです。以前、子どもたちは普段の生活や遊びの中で、学校での学習の素地を自然と身に付けていました。先日、石井恭子先生に見せていただいたおもちゃは、木が宙に浮いたような不思議なものでした。「何で浮いているの？不思議！」と言うと、恭子先生に「触ったら分かるよ」と言われ、触った瞬間、「磁石なんだ！」と私。恭子先生曰く「でもね、子どものころに磁石で遊んだことのない子、学校でも実験しないで教科書だけで勉強した子には分かんないのよね。」…教師の世代に普通にあった生活経験が根っこにならぬ生徒世代が「学力低下」となるのは、当たり前かもしれません。それを補おうと即効性のある詰め込みを増やすか、遠回りでも根っこをはぐくむか…大きな別れ道です。また、根っこの一つに、子どもたちの「人間関係」もあります。兄弟がいる、祖父母がいる、些細な喧嘩やいざこざがしょっちゅうある、そんなわずらわしいけど濃い人間関係のない環境で育っている子どもたちがたくさんいる中、私たちのデザインする授業風景は自ずと変わってくるでしょう。子どもたちの現実を見つめた上で、どのような学びを保障するかが、教育にかかわる者すべてに問われています。

教育は百年の計。私は、未来を左右する一番のかぎが教育だと思っています。何が何でも、学校を、教育を良くして、社会や一人一人の未来を守っていきたくと思っています。そして、福井大学の教職大学院にかかわるすべての方が、その同志なのだと思います。一緒に、これからの教育をデザインし、実行していきましょう！どうぞよろしく願いいたします。

21世紀の教育を担う 若い世代の院生紹介②

教職専門性開発コースには臨時任用教員として現場に勤務しながら学んでいる院生も6名います。今回はそのうち3名に自己紹介をお願いします。



河合 啓子 かわい けいこ

(鯖江市立待小学校)

4月から教職大学院に入学し、早2か月が過ぎようとしています。1年前に教職大学院設立の話を耳にし、それからというもの「この大学院に入り、子どもの心に残りつづける教師に成長したい」とい

う思いが募っています。

私は1年前に本学部を卒業し、臨時任用講師をしています。今年度は2年目です。昨年度は、鯖江市中央中学校で1学期間英語を教え、2学期からは鯖江市立待小学校で2年生の担任を経験させていただきました。今年度は、同小学校で1年生の担任を任されています。担任を経験し、学級の子どもたちに対する熱い思い、それに伴う喜びや悩み、毎日の子どもの成長を感じとることができ、とても充実しています。学部時代の教育実習や大学での授業からでは担任の「役割」は全然見えてきませんでした。「実践は知識よりも勝る」と改めて強く思っています。毎日が試行錯誤の連続で失敗することが多いですが、そんな時、同僚の先生方の言葉や手助けに支えられています。今や放課後が学年会となり、子どもたちのことや授業の相談などによっていただいています。講師をやり始めてまだ1年足らずですが、子どもたちとのコミュニケーションが大切なのはもち

ろんのこと、同僚の先生方とのコミュニケーションもまた同じくらい大切なものと気付きました。

合同カンファレンスでは実績のある先生方の実践を聞いたり、私の実践などを紹介したりします。「ああ、こんな考え方、見方があるのだなあ。」「こんな方法だと子どもが反応してくれるかもしれないなあ。」など、知識が詰まった本からでは得られない実践力につながるものを得ることができます。それを生かし学校生活で子どもの見方を変え、子どもとの接し方を工夫することで今までと違った子どもの反応を引き出すことができ、一喜一憂しています。学校での生活を省察し、それを話す、また他の先生方の考えを聞くことが子どもの成長を促す手を導く一歩だと思えます。

これから2年間ある教職大学院では、目の前にいる子どもたちの姿から「自分は教師として子どもたちに何を伝えたいか」「どのような子に成長してほしいか」を明確にし、そのための手立てを考え、実践していきたいと思います。常に探究していく姿勢を忘れず、様々な経験をお持ちの先生方の知識や技を知り、それにアレンジを加え自分のものにしていきたいです。そして2年後に、「今よりも成長している教師」として、また子どもたちと共に一歩ずつ成長しつづけたいと決意しています。

村井 信吾 むらい しんご

(福井大学教育地域科学部附属中学校)

今年度から臨任教諭として福井大学附属中学校に着任させていただいた村井信吾です。私はこれまでに中学校、高校とそれぞれ1年ずつ、合わせて2年間という短い期間ではありますが、「徹して一人を大切に」の信念のもと生徒と接してきました。これは、どんな言動であっても必ず価値はあり、そう思うことができないのは生徒ではなく、それを見いだせない私自身の問題であると考えていることによります。

私はこれまでの授業において何よりも「聴く」ことを授

業の中心に据え、「どう分かりやすく教えるか、また、いかにうまく教えるか」を考えながら取り組んできました。その中で生徒たちは、与えられたものや取り組まなければならないものに対し、少しずつ意欲をもって取り組むようになりました。これにより確かに今までよりは良い、またはフラットな状態に立つことはできましたが、次第に目の前



問題にただ対処しているだけで、本質的な改善には至っていないのではないかと私は感じるようになりました。

勉強自体が生徒にとって与えられた義務的なものであることは変わっておらず、これが必然性を帯びた学びへと昇華していくにはどうすればいいのだろうか、私の課題がここにあり、これが教職大学院を志望した主因でもあります。

附属中学校に着任してからは毎日のように「探究」と「必然性」という言葉を自問自答しながら、それらを暗中模索している日々です。そして、探究とは何かを考えていくうちに、私自身「どうやったら生徒の学びが広がり深まっていくのか」に焦点を当てるようになっていきました。しかし、私はいつの間にか探究という言葉に縛られ、何か定義されたものがあって、それにふさわしいものに授業を作り上げなければいけないような感覚に駆られていました。



山崎 祥子

(嶺北養護学校)

私が唯一自信を持って言えることは子どもが好きだということです。ですから大学入学時、

子どもとかかわる何かの仕事をしたい、いろいろな可能性を探りたいとは考えていましたが、教員になるかどうかははっきりとは決めていませんでした。しかし、大学でいろいろな子どもたちとかかわるボランティアをさせていただき、またそれに携わる種々の仕事も知った上で、やはり教員になりたいと思うようになりました。そしてやるからには自分に力を付け、子どもたちとかかわっていきたくと思うようになりました。

私は、福井大学を卒業して以来、嶺北養護学校で講師として働かせていただいています。大学でいろいろな子どもたちと出会った経験から障害児教育を専門とし、より力を付けて子どもたちと接していきたいと願う私にとって、特別支援学校で働けるという今の環境はとてもありがたく、一瞬一瞬が勉強の毎日です。

働き始めて1年目は介助員として、日々楽しく子どもたちと過ごしていました。そして昨年度の2年目は講師として任用されました。この1年は子どもから教わることの多

それに気付いたのはつい先日のことで、どの生徒も自由に質問して学び合い、失敗できる空間の中で生き生きと学んでいるその姿に、私が少ない経験の中でやってきたこと、また私の原点でもあり、やろうとしていたことは、一人を大切に、どの一人も逃すことなく支え、尽くしていくことであったと。

そして、その授業は生徒ばかりか私にとっても大変楽しいものでした。もちろんこれらの感覚や認識が主観的ということも、また、今後うまくいかないときも当然あるとは思いますが、しかし、これを一つの指標として、偶然ではなく必然のもとこのような学びを私は生徒に提供していきたいと考えています。このためにも私はこの大学院で前進していきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願い致します。

やまざき しょうこ

さを改めて実感した年となりました。この年、一緒にいた子どもから数え切れないことを教わりました。「学校って何?」「教育って何?」いろいろなことを考える機会を与えてくれ、泣いたり笑ったり、ちょっとした目線を送ったり、いろいろな表現で気持ちを伝えてくれるその姿にうまく対応できない自分があり、それがとても悔しく、また申し訳ない思いをしました。大学院でのカンファレンスなどを通して振り返ってみると、その子の行動の意味が少しずつ分かったり、自分では気付いていなかった自分たちの行動の持つ意味に気付いたりということがありました。振り返れば振り返るほど発見があり、一緒にいる期間が終わった今も、その子から教わることの多さに驚いています。同時に振り返りとらえなおすことの大切さを感じています。

講師として3年目になった今、教員として子どもを見る力、子どもとかかわる力をもっと付けていきたいという願いを持ち、教職大学院に入学しました。教職大学院でのカンファレンスでは、自分の実践をゆっくりと時間をとって見つめ直し、それを様々な校種の先生方と実践を報告し合えるということをととても有意義に感じています。いろいろな校種、いろいろな立場、いろいろな経験を持つ先生方と会話をしながら自分の考えを伝え合い深め合い、教員としての力を付けていけたらと思っています。

21 世紀の教育を担う

スクールリーダーコース院生の自己紹介①

スクールリーダー養成コースには19名の現職教員院生が在籍しています。今回はそのうち9名に自己紹介をお願いしました。

稲津 公子 いなづ きみこ

(福井大学教育地域科学部附属小学校)

大学附属小学校に勤務して6年目。6年間低学年の担任をしています。1年生は“1年生だぞ”という魔法にかかり入学し、その魔法が解けるころ、初めて自分らしさを出し始めますが、皆お日様の方を向き“よくありたい”と思っています。そんな子らが、どのようなことから何をどのように学んでいくのか。どのような時に学びは起こり、その子のものになっていくのかを、手探りしながら探っています。

そんな子どもの姿を、じっくり見ることで、多くのことに気付かされ、考えさせられる毎日です。以前は、当たり前前に思っていたことが当たり前ではなくなることで、新しい何かが見えてくるそんな経験を繰り返しています。昨年度は、うさぎの人形を何時間もかけて作り「遊んで。あいちゃんのお人形よ。かわいいでしょ。」と、うさぎに頼む1・2年生がいました。「先生、どうしてあいちゃん、遊ばないんやろ。」と、教師に真剣に聞く子どもたちを見て初めて「小さい子とはにかく自分中心」と認識はしていた言葉が、初めて自分の中にすうっと落ちてきました。私自身の「経験からの学び」の瞬間でした。そして、その子らは、うさぎは自分たちと違って人形で遊ぶようなことはしないということを「経験からの学び」として得たのではないかと考えます。言葉で言ってしまえば当たり前のことを体験する中で、それがあつた瞬間、意味ある学びへと変わっていくのではないかと考え、毎日子どもと過ごすことを楽

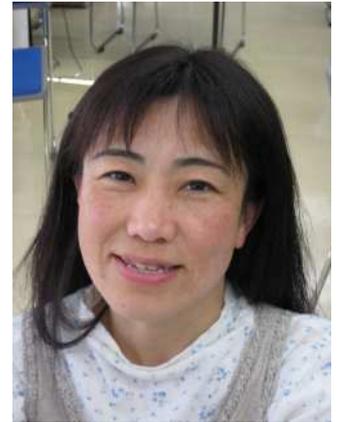
しんでいます。

先日ふと思いついて、いたずらっ子の横に立って授業をしてみました。視界には入らないその位置で何時間かを過ごしていると、その子がふと私の服の裾をつかみ「この前僕さあ……」

と内緒話を話してきました。授業中なのですが、私を身近に感じ思わず話したくなったのでしょうか。

忙しい毎日に追われ、あつという間に一日が終わっていきます。そして翌日。少し疲れ気味に登校すると、追いかけるように子どもの元気な声が私の耳に響いてきます。明るく元気な子どもの声が、私の中に一気に一日の元気を作り出します。今年度は、子どもたちの元気パワーと……なぜか少しはまっている京都の散策(?)を自分のパワーの源にして「子どもが育つ」ことを見つめていきたいと思っています。

大学院を多くの考えに触れることができる場と考えています。どうぞ、よろしく願いいたします。



宇野 泰裕 うの やすひろ

(福井市豊小学校)

現在、福井市豊小学校で6学年担任と研究主任をしながら教職大学院に籍を置いています。

大学時代は、教育学部の学生でありながら、遺跡の発掘現場を渡り歩き、大学へ顔を見せる時は雨の日だけという状態でした。4年間で銅鐸の鋳型が出土した三国加戸下屋敷遺跡や県内初の石室復

元整備を行った永平寺諏訪間1号墳など20余りの遺跡の発掘調査に参加することができました。その中で考古学を中心に歴史のおもしろさを、子どもたちと共有したいとの思いが教職を志す理由ともなりました。しかし、ほとんど専門的な知識や経験を経ないまま卒業後、すぐ先生と呼ばれる立場で、いざ授業を始めるとまさに苦労の連続でした。その当時は思い出すと周囲の先生方に本当に教えられ、支えられてきたお陰で、今の自分があると感謝してい

ます。その中で子どもたちと楽しみながらも確かな力を付ける授業をしたいという思いで、日々の授業を積み重ねてきました。その思いは、小学校から中学校へと転任してからも、そして中学校から小学校へ12年ぶりに転任してからも、ますます強まる一方でした。

それが今回の教職大学院入学への大きな動機ともなっていますが、担任をしながら研修を重ねることが果たして両立でき得るのかは大きな悩みでもあります。今年度1年間、子どもたちの社会的関心を高めつつ、既得の知識や生活経験を生かしながら判断力を高める資料活用の在り方について探っていきたいと思っています。社会科歴史の授業では、教科担任制で受け持っている学級で楽しみながら、子どもたちの自由な発想を生かし、資料をもとに正しく判断する力を高める授業に取り組んでいます。子どもたちは

歴史の授業を楽しみにしてくれていますが、逆に、教材研究を進めれば進めるほど、授業進度が上がらないという悩みも出ています。

さて最後に、本校では「共に学び合い、くらしに生かす子どもたち～見通しをもち、自らの学びを活用する子（個と集団づくり）をめざして～」を今年度の研究主題として研究に取り組んでいます。様々な学習で得た知識を自分達の生活経験と結び付けながら考えることで、さらに自分の生活を豊かにするような学習単元を構想したいと考えています。その成果を11月6日、自主研究発表会という形で公表することになっています。よろしければ是非ともご参加ください。もちろん私も公開授業者の一人として頑張りたいと思っています。

川崎 正人 かわさき まさと

(越前市武生第一中学校)



教師になって20年が経ちました。21年目の今年度、教職大学院で学ぶ機会を得ることができました。「頑張らなくては」という思いとは裏腹に、学生食堂で食事ができたり、安く本が買えたり、もしかして学生証を見れば学割が利くのかななんて考えてみたり…。変なところで学生という身分を楽しんでいます。

私が勤務している越前市武生第一中学校は、特別支援学級を含めると学級数が24、職員数は47名です。大きい学校で職員が多いだけに、先輩の先生からはもちろん、若い先生からも学ぶことはたくさんあります。確かに忙しいですが、充実した毎を送っています。

今年度は持ち上がりで2年生の担任をしています。多感である一方、目的を見失いがちになるこの時期に、「出会い」をテーマに進路について考えていくことを、総合的な学習の時間の中で行っていきたいと計画しています。社会に出て働いている人と、赤ちゃんやそのお母さんと、本校の先輩と出会う中で、現在の自分を見つめ、将来に思いを馳せることができるようにしたいと考えています。

ここで、私が日ごろから心掛けている言葉を紹介します。それは「今日の一針(いっしん)明日の十針(じっしん)」という言葉です。今日ならば一針縫うだけで直るほころびでも、

明日になれば十針縫わないと直らないくらい大きなほころびになってしまう。すなわち、今日という

日を、今の瞬間を大切にしようという意味です。毎年、学年始めに自分のクラスの生徒に紹介をしながら、楽な道を選びがちな私自身の気持ちも引き締めるようにしています。

20年前、初任者同士が研修等で顔を合わせる事が何度かありました。福井大学出身でなく、しかも同級生とは2年遅れて教師になった私は、最初のうちはなかなか話し相手が見つかりませんでした。しかし、教科を通して、部活動を通して、今ではたくさんの先生方とのつながりができました。私にとって、とても大切な財産です。

今回、教職大学院で学ぶことになり、大学院の先生方、同じスクールリーダー養成コースの先生方、教職専門性開発コースの皆さんと出会うことができました。この出会いに感謝し、共に学び合えるこの1年を大切に、教師として人間としてさらに成長できるように努力していきたいと思っています。



酒井 晴美 さかい はるみ

(福井大学教育地域科学部附属特別支援学校)

附属特別支援学校の酒井晴美です。現在の勤務校に来て、今年で10年目です。本校

は小学部・中学部・高等部の3つの学部で、56名の児童・生徒が学んでいます。私は現在中学部の所属です。この10年一貫して取り組んできたことは、一人一人をしっかりと見つめること、一人一人に応じた教育をすることです。これ

がなかなか奥深く、「この子にとって必要なことって何だろう」「将来の生活に生きる力って何だろう」「学校教育の期間の中でできることは何だろう」と模索する日々です。子どもたちの本音で生きる強さにもどんどんひかれて、特別支援学校でやっていきたいと思い、5年前に免許も取得しました。

具体的な取組としては、小学部での「遊び」や、「個別教育計画」や、「地域との連携」などです。昨年度の研究会では、「連携」をテーマに保護者の方と一緒に事例発表をしました。私にとって、初めての経験であり、たくさんの学びがありました。

ところで、本校は生活教育を行っています。生活が学びの「目的」であり、「内容」であり、「方法」でもあるという昭和60年代から現在まで、変わらぬ価値観・考え方に貫かれています。その象徴として暖色の「平和の楽園」という壁画があります。「その変わらなさはいったい何?」「なぜ?」。それを自分なりにつかみたい、そして、その良さをもっとアピールしたいと思っています。校内でも、

生活教育を大事にし、さらに個や時代に応じたものにしていきたいとの思いがあり。中学部では昨年度、時間割を変えました。高等部と一緒に「仕事」の時間をなくして、中学部独自の「ゆうゆうタイム」の時間を拡大しました。その中で、生徒たちが「見える、分かる、実感する」くらしを作っていきたい、生徒たちの学びを見つめていきたいと考えています。

教職大学院では、いろんな校種のいろんな人と接することができて、情報を送受信し合い、その中で違う視点を与えていただいたり、自分の考えを深められたりと、新鮮な気持ちで大学の講義室に来ています。教職大学院に行こうと思ったのは、その場の勢いみたいなのもあるけれど(すみません・・・)、今は、せっかく与えられたこの機会を十分に生かしたいと思います。現在の中学部での実践がそうであるように、物事を創造していく時だからこそ、何でもできる可能性があって、やりがいがあって、充実感があるようにしたいと思います。よろしくお願ひします。

高村 祐司

たかむら ゆうじ

(福井市至民中学校)

とはたくさんあるはず。こうした世代継承のサイクルを構築することがクラスターのねらいです。



そして、地域との連携。至民中は地域教育力の活性化を目指す拠点としての使命も求められています。恵まれたスペース、充実した設備の地域開放エリア。そこでは、いろいろな人たちが行き交い、地域の文化が交流される「街角」となり、その中で子どもたちが育っていく、そんな情景に思いを巡らせながら、取組を進めていきたいと考えています。

それぞれが前例のない、前年度踏襲というわけにはいかない新たな取組です。今更ながら、これまでの研究の前提にしてきた“自分たちで前例を創りあげる。”ことの持つ意味の重さを実感しています。

多くの可能性を秘めた新しいシステムの中で仕事ができること、大学院という形で自身を高める機会をいただいたこと、こうしたチャンスに出会えたことに感謝しつつも、それらを新生至民中に還元していく責任を感じています。どうぞこれから、宜しくお願ひいたします。

ガラス張りの開放的な校舎。それぞれの教科エリアを構成する各教室は、曲線を基調として教科のひろばを囲むように配置されています。今これらに、春の柔らかな光が射しこんでいます。

本年4月いよいよ本校は、異学年教科センターという新しいシステムの学校としてスタートしました。

教科センター方式がいかにかに有効に機能するかは、何といってもそれぞれの教科エリアの運営が要と言えます。足を踏み入れるだけで教科の世界に誘う。私の教科である理科のエリアでは、校舎周りの植生調べや校区のタンポポ分布調査などカリキュラムに合わせた掲示を始めています。顕微鏡等も気軽にのぞけるようにして、できるだけ生徒が実際に触れ体験しながら理科の学びに入り込める環境を工夫したいと考えています。また、生徒の学びの履歴を蓄積しながら協働の学びへとつなげていける点も教科センターの特徴と言えます。どのように表現させ、どのような形で残していくか、これからの大きな課題だと考えます。

異学年クラスター、これも本校が目指す新しい教育の柱の一つです。それぞれの教科エリアには、1年生から3年生までの各ホームが配置され、クラスターと呼ばれる異学年集団を形成しています。教科センターが学びの場なら、このクラスターは生活の基盤です。昔の子どもたちがそうであったように、異年齢の集団の中で自然に教えられるこ



知場 克幸 ちば かつゆき

(美浜町立美浜中学校)

美浜中学校で3学年主任と研究主任、そしてエネルギー環境教育を担当しています。今年度は教職大学院のシステムを十分に活用して、授業改革とエネルギー環境教育に取り組んでいきます。

昨年度末には現職教育で実践を振り返り、次年度への展望を示してきました。今までの研究体制を一新し、手探りながらも一人一人の教師としての力量を高めることを目指そうとするもので、どの先生も新たな気持ちで取り組んでくれそうです。その中で「授業公開」を提案したのですが、既に5名の方が実践してくれました。

2学期はエネルギー環境教育です。新しい教育課題であり、現在はその見通しも残念ながら立ってはいません。だからこそ、みんなで授業を検討し、3学期に実践していこうとしています。「急激な変化でなく、一人一人の確実な

前進を！」そんな体制ができつつあります。

昨年度に研究主任を受けたときは、前年度の取組をそのまま継続し少しの改善を加えよう、そんな低い志でした。エネルギー環境教育においても、一人で研修を受け、悩み、計画を立てていく、そんな狭い研究でした。

今回、このような思い切った改革を目標にすることができたのも教職大学院がきっかけです。正直、参加するまでは大変不安でしたが、実際に始めてみて、皆さんといういろいろな話をしていく中で、少しずつ前向きにとらえられるようになってきました。内容は違っても新しいことに挑戦しようとしている姿勢は共通しており、連帯感も感じます。

教職大学院1期生・スクールリーダーとして大きな責任を背負っていますが、そこから逃げないスピリッツを忘れず、今後も研究・実践を続けていきたいと考えています。

以上、自己紹介と近況を報告させていただきました。今後ともご指導のほどよろしくお願いたします。

前田 良則 まえだ よしり

(福井県教育庁嶺南教育事務所)



もいます。そんな実態を踏まえ、この2つの力をいかに付けていったらよいかということのをねらいに据え、研究実践を進めました。さらには、授業の終わりに自分の言葉でまとめる「書く」活動を取り入れ、授業を整理する振り返りを行いました。

このような折、福井大学教職大学院開設の話を目にしました。そして、冬期集中講座に参加したところ、これまでイメージしていた講義中心の講座ではなく、現場での実践の展開を語り合い、記録化し、そしてまた語り合うという内容の講座を経験しました。その活動を通してこれまでの研究主任としての実践を省察することができたように思います。また、話し合いの授業でやってきたことと大学での学習スタイルがよく似ていると実感しました。

この1か月間、最初は子どもと向かい合う機会がなくなったことが少しさみしいと感じていましたが、今は、自分の置かれた環境の中で、今しかできないことを実践していこうと考えています。そして、自分自身が新しい自分に出会えるための教職大学院にしたいと思っています。皆さん、よろしくお願いたします。

「F12323313312323F3456◎」これは何の数字だと思われませんか。暗号ではありません。この数字は、私がこれまで学級担任をしてきた学年を示しています。Fはフリーで副担任をしていたということです。最後の3つの数字だけが、4以上の数になっています。つまり、長年中学校で勤務した後、この3年間は小学校で勤めたということです。そして、今年4月からは、数でもFでもない◎・・・学校現場を離れて、嶺南教育事務所の研修課に勤めることになり、1か月が過ぎようとしています。

さて、中学校で数学の教員としての生活が長かった私にとって、小学校での3年間の経験はとても新鮮なものでした。最初の2年間は体育主任として子どもたちと汗を流し、体育的な行事に一生懸命に取り組みました。そして、昨年度は6年担任と研究主任を務めました。この一年で小学校の最高学年として学校全体を動かさなければいけない大変さと難しさを経験しました。研究主任としては「話し合いの授業をどう創るのか」というテーマで授業改善に努めました。授業について、改めて見つめ直すよい機会を与えられたと思っています。

この時の研究テーマであった「話し合いの授業」を創造していくには、「話す」「聞く」という2つの力の育成がとても重要です。子どもは、多くのことを語る事ができません。また、話を聞いているようで実は聞いていない子ども



松宮 弘明 まつみや ひろあき

(若狭町立熊川小学校)

皆さんこんにちは。私は、若狭町立熊川小学校に勤務しています松宮です！本校は、江戸時代に作られた町『熊川宿』が残る自然いっぱいの歴史ある町並みが残るところです。中でも、町並みの真ん中を流れる前川は風情があり、夏には涼しさを演出しています。子どもたちは足を浸し、涼を取るのが大好きです。

そんな、熊川小に赴任してはや5年が過ぎました。現在本校の児童数は37名で、この5年間で20人の児童数が減少してしまいました。複式学級も保有しており、1学級の人数も少人数でその長所と短所に悩まされる日々が続いています。

本校における現在の課題は、やはり、少人数が故の短所をプラスへ転じさせるために、全職員が共通理解してその目標に向かっていくことです。具体的には、授業において他とのかかわり合いの意識が薄く共に高まるという考えを持ちにくいことからの脱却を目指そうということです。また、子ども自身の主体的な学びや取組が弱い現状から、子どものリーダー性を育て自ら学ぶ姿勢を身に付けさせ

ることを目指そうということです。現在、この2点についてそれぞれ第1歩を踏み出し始めたばかりです。1点目の授業では、授業についての考え方がいろいろある中で、各教員が共通理解し考えの共有化を図るための研究会の見直しからスタートすることにしました。また、2点目のリーダー性の育成では、児童会組織の見直しとネーミングの見直しに取り組みました。(例：給食委員会→すききらいなくそう委員会)ほんの些細なことではありますが、1歩1歩着実に前へ進んでいきたいと考えています。

これまでの、私自身の教職生活を振り返ると、小規模校での勤務が長く複式学級経験が半分になりました。これまでの自分の仕事を総括し、今後に生かすためにも教職大学院での学びは非常に有意義であり、自身のみならず他へも波及できるものであると信じています。

へき地小規模校には他校には見られない、子どもの素直さや明るさ、また、保護者、地域の方々の温かい支援があります。このような学校教育に欠かせない土壌をフルに生かした教育が推進できることを今後も追究していきたいと考えています。皆さんと共に高まっていくことを楽しみにしています。よろしくお祈りします！！

水持 直幸 みずもち なおゆき

(あわら市金津中学校)



金津中学校での6年間、学級担任、社会科教員、部活動顧問として自分なりに精一杯取り組んできました。生徒と共に授業を作り、学校行事や部活動に燃えることは教員として大きな楽しみでした。しかし、自己研鑽や研修については十分な取組ができていないのが現状でした。今回、教職大学院に参加できることとなり、集中講義やクロスセッションのたびに新しい発見があり、考えさせられることもたくさんありました。

これまで金津中学校では、「小中連携事業」の学校見学会や小学生との交流事業の企画や、「金津高校との中高一貫教育」で、昨年度初めて作られた中高一貫クラスの担任になり、新しい交流の企画運営に取り組んできました。また学力向上や授業公開などの提案を行い、金津中学校の研究にかかわってきました。

これから、様々な先進校の実践や先生方からのアドバイスを生かして、今までの取組を更に充実させていきたいと考えています。スクールプランを基に、より開かれた学校を目指すために、学校の研究組織を効率化させたり、「小中連携事業」や「中高一貫教育」では、児童生徒の交流を深めるとともに、教員の相互の交流や指導内容の系統化について検討し、あわら市の特色のある教育の在り方について

実践を進めたりしていきたいと考えています。また、地域の教育施設や地域の人材など、あわら市内外の地域資源の有効活用を図っていきたいと考えています。

そして、様々な施設な組織と連携を図りながら、生徒も教職員も生き生きと学校生活を送れ、信頼される魅力ある学校を作るために、自らの資質を高め、学校の中核を担えるように努めていきたいと思っています。

教職大学院では、校種の違う先生方と出会い、いろいろな研修内容を聞き取ることで今までと違った視線を持つことができました。また、情報交換を進める中で、自分の歩みを振り返る機会が持てました。スクールリーダーの先生方との関係も深まったように感じています。

「教職大学院は、福井から教育を変える、福井から新しい取組を始めるという意味で、『福井の松下村塾』や『教育界の松下政経塾』のようだね。」と言われたことがあります。そういう気概と進取の心構えを持ち続けながら、意義のある一年にしたいと考えています。

研究集会・ラウンドテーブル 予告

6/6

fri 9:00-16:30

福井大学教育地域科学部附属中学校

第43回 教育研究集会

学びを拓く《探究するコミュニティ》(1年次)

ー子どもの学びを見取るー

福井大学教育地域科学部附属中学校では、「探究」と「コミュニケーション」をキーワードとして、子どもも教師も学び合う「探究するコミュニティ」の実現に向けた研究を進めています。これからさらにこの「探究するコミュニティ」の在り方を模索し、より質の高い学校文化へ高めていこうと考えており、今年度は、子どもの学びをどう見取るかに視点をあて、テーマの解明に迫ります。

■ 日程-----

8:30	9:00	9:20	9:40	10:30	10:50	11:40	12:40	14:00	14:20	14:50	15:00	16:30
受付	オリエンテーション	移動	公開授業Ⅰ	休憩	公開授業Ⅱ	昼食	分科会	移動	全体会	休憩	シンポジウム	

■ シンポジウム-----

シンポジウム

生きる力を育む授業を
どうデザインするか

～新学習指導要領がめざす学校づくりを求めて～

講師

- 秋田喜代美氏 (東京大学大学院教育学研究科 教授)
- 鹿毛 雅治氏 (慶應義塾大学教職課程センター 教授)

新学習指導要領の基本理念である"生きる力"。そこで求められるコンピテンシーを育成するにはどのように授業をデザインすればよいのでしょうか。その柱となる視点を明らかにするとともに、教師の協働的な取り組みのあり方を探ります。

■ 申し込み方法-----

- 申し込み方法や交通機関の詳細は、<http://www.f-edu.fukui-u.ac.jp/~fuzoku-j/> を参照ください。
- 平成20年6月2日(月)までに、申込用紙を郵送またはファックスでお送りください。
- 会費は2000円です。
- 問い合わせ先 〒910-0015 福井市二の宮 4-45-1
福井大学教育地域科学部附属中学校 教育研究集会 受付係
TEL : 0776-22-6985 FAX : 0776-22-6703

6/14 sat

福井大学教育地域科学部附属幼稚園

平成 20 年度 公開保育

伝えあう ひびきあう (1年次)

公開保育	9:00~12:00
全体会	13:20~14:20
分科会	14:30~16:00

8:30	9:00	11:30	13:20	14:20	14:30	16:00
受付	公開保育 好きな遊び・おやつ 降園前のひととき	昼食	全体会	移動	分科会 こんな時どうする? (ワークショップ)	

	指導・助言者	研究協力者
3歳児	竹内 恵子 先生 (福井大学) 広澤 愛子 先生 (福井大学)	中澤 敬子 先生 (私立エンゼル幼稚園 副園長) 吉川 裕子 先生 (福井大学附属中学校)
4歳児	河合 恭江 先生 (福井県教育委員会) 松木 健一 先生 (福井大学) 石井 恭子 先生 (福井大学)	菅谷 初美 先生 (福井市麻生津保育園 園長) 政井 英昭 先生 (福井大学附属特別支援学校)
5歳児	平田 佳代子 先生 (福井市教育委員会) 松友 一雄 先生 (福井大学) 岸野 麻衣 先生 (福井大学)	永井 史江 先生 (福井市鶉幼稚園) 皆美 たかね 先生 (福井大学附属小学校)

●参加申し込み方法 5月30日(金)までにFAXでお送りください。

FAX 0776-22-6718

●参加費 500円

●問い合わせ 福井大学教育地域科学部附属幼稚園

〒910-0015 福井県福井市二の宮4丁目45-1

TEL 0776-22-6687 FAX 0776-22-6718

6月のラウンドテーブル・速報

主催：福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）

6/28

sat 13:30-17:30

協働の教育実践と教師の力量形成

Session I 13:30-15:00 公開シンポジウム「新しい教師教育を語る」

世界的に進む教師教育改革。その方向性を見定めながら、実際に進みつつある教職大学院における構想と実践を共有します。門脇厚司（筑波学院大学：教師教育学会会長）・寺岡英男（福井大学）ほか

Session II 15:20-17:30 ワークショップ「学校と大学が協働する教育改革」

小グループに分かれ、学校と大学が協働して進めている教育改革の取組について、各グループ2つの大学から具体的な事例をもとに語ってもらい、学校・大学それぞれの視点から議論します。

6/29

sun 8:50-14:30

実践研究ラウンドテーブル

はじめに 8:50-9:00

Session III 9:00-11:20 展開を語る／プロセスを聴き取る part1

小グループに分かれ、実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語るとともに、語られる展開に耳を傾け、活動の場면을共有し成長のプロセスを探っていきます。教職大学院の院生、拠点校や連携校の校長・教頭、医療・福祉・教育の多様な分野の実践者、学部で学ぶ学生など、様々な立場の参加者を予定しています。9:00-9:40（自己紹介） 9:40-11:20（報告1）

Session IV 12:00-12:15 全体会「実践を語ること・書き表すことの意味」

Session V 12:20-14:30 展開を語る／プロセスを聴き取る part2

午前中と同じグループで、もう一つ報告を語り／聴き、1日を通してそれぞれが考えたこと・感じたことを共有します。
12:20-14:00（報告2） 14:00-14:30（結び）

●申し込み●

①氏名（ふりがな）、②所属・役職、③メールアドレス、④電話番号、⑤参加日（両日・6/28のみ・6/29のみ）、を明記の上、6/14(土)までに dpdtfukui@yahoo.co.jp へてお送りください。なお 6/29 の実践報告者を募集しています。報告いただける方は申し込みの際にお知らせください。

（※2008.05.16速報版につきプログラムの変更等があり得ます。）

教職大学院報道ファイル

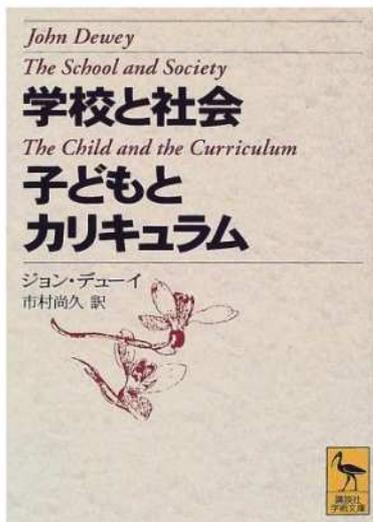
2008年5月8日(木)

NHK福井「LIVE610」(18:10~19:00)において「教職大学院を密着取材」と題して、福井大学教職大学院の様子が報じられました。



教育実践と教育改革を考えるために (3)

John Dewey『学校と社会』（市村尚久訳）講談社学術文庫、1998



前号で言及のあった「シカゴ大学の小さな附属学校」。そこでの実践を踏まえて『学校と社会』は出版された。100年余り前、アメリカが急速に工業化社会に移り始める真只中の新興工業都市シカゴで。今私たちは、その工業化社会から次の知識基盤社会への移行という「歴史の大きな『峠』（神野直彦）に差ししかかっている。デューイは、私たちより一つ前の峠をどう越えようとし、新たな学校の役割を探ったのか。『学校と社会』は貴重な手掛かりを提供してくれる。

工業化社会の前の家内制手工業の時代。そこには、自然に触れ、事物や材料を実地に操作する過程に関わることでしっかりと身についた知識・観察・工夫・構成的想像などが絶えず訓練される教育上の意義があった。工業化社会に変わり、教育上も根本的な変化が起こる。それを嘆くことなく、得たものを認めその利点に与りながら、生活のもう一方の側面—歴史貫通的な過程の典型として、社会生活にとって第

一義的に必要な事柄のいくつかをわきまえさせる手段として、さらには必要とされる事柄が人間の次第に成長する洞察力と工夫によって充たされてきた過程の典型として、活動的な仕事をどう導入できるのか。レッスンを学ぶ隔離された場所から、社会生活の一つの形態としての学校にどう転換できるのか。社会の進歩とこれからの学校をデューイは探っていく。

しかし、当時の伝統的な学校はどうか。子どもが構成し、創造し、探究できる場・材料・空間の欠如。教育の方法やカリキュラムの画一性。重力の中心を子どもの外部に置く旧教育を、コペルニクス的に変革し、子どもが中心となる学校改革の道筋が示される。また、問題解決の力も、その成長は自然の過程だが、それを意識的に適切に利用することで、問題を設定し解決する力を培うことは、知的教授において最も重要な課題であり、それがなければ、精神は、いつまでたっても慣習や外的な暗示に翻弄されるままである、と言う。PISAの調査結果でも、定式化された問題は解けるが、生活の中から問題を構成し、方略を立て、問題を解く力は弱いことが指摘されている。そうした力を培うことによる十全な社会参加のできる市民の形成。それは、これからの社会では、デューイの時代よりも一段と切実な教育的課題である。

『学校と社会』は、実験室学校の在り方についても触れている。「生きている実践モデルというものは、複製されるような代物ではない。それは当該原理の実行可能性とその原理を実行可能とする方法を、実証し具体的に明示することなのである。」と。私たち教職開発専攻での学校改革は、いくつかの拠点校との協働として取り組まれる。「生きている実践モデル」をこれからどう作り上げていけるか。それは、デューイのもう一つ後の知識基盤社会と言う大きな峠に差ししかかっている中、私たちに課せられた仕事である。（寺岡英男）

Schedule

- 5/24 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30)
- 6/6 fri 福井大学附属中学校公開研究集会 (任意参加)
- 6/14 sat 福井大学附属幼稚園公開保育 (任意参加)
- 6/28 sat - 29 sun 実践研究福井ラウンドテーブル
- 7/12 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30)
- 7/22 tue -24 thu 夏の集中講座 1a (9:30-17:00)
- 7/29 tue -31 thu 夏の集中講座 1b (9:30-17:00)

- 8/1 fri - 2 sat 教育のアクションリサーチ研究会
(熱海：東京大学主催 (任意参加))
 - 8/4 mon - 6 wed 夏の集中講座 2a (9:30-17:00)
 - 8/6 wed - 8 fri 夏の集中講座 2b (9:30-17:00)
 - 8/18 mon - 20 wed 夏の集中講座 3a (9:30-17:00)
 - 8/20 wed - 22 fri 夏の集中講座 3b (9:30-17:00)
- 集中講座は1・2・3それぞれ ab どちらか選択 (ab の組合せ自由)

[編集後記] 第3号では、初めての合同カンファレンスについて寄稿いただいた。News Letterが、我々の学びの過程を振り返り共有するための媒体になる可能性を感じた。ここからまた学びの輪が広がっていくことを期待したい。(き)

教職大学院 Newsletter No.3
2008.05.16

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
team3: 寺岡英男・上野澄子・中村保和・岸野麻衣
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdftukui@yahoo.co.jp